



関西支部創設のころ

京都大学農学部の農芸化学科は、創立当時農林化学科といった。意図するところを推察するに、「農林化学」は農業や林業に関連することを等しく取り扱うということでこのようにされたのであろう（農芸化学科と改名されたのは戦後である）。

この農林化学科を中心に、関西地方にある農事試験場、高等蚕糸学校等におられた農芸化学者、農学者が相寄り、農芸化学会関西支部が創設されたのが昭和9年4月であったが、どうして関西支部を創設する気運になったかは大きく2つの流れがあったように思われる。

第1は農芸化学会自体が日本化学会から独立して（大正13年7月）研究活動がますます盛んになっていった時期であった。

第2は大正13年に京都帝国大学に農学部が開設され、農林化学科には大杉（土壌、肥料）、鈴木（生物化学）、志方（林産化学）、近藤（栄養化学）、武居（農産製造）、片桐（醸酵生理学）の少壮教授が研究活動に意気盛んであり、得られた研究結果を1日も早く世に問いたいとの熱意があった。このような気運のもとで関西には学会の支部の創設について早くから高い関心があった。

この高まりのなかで、昭和5年5月近畿農芸化学会懇話会を発足させる運びとなった。会長は同志社大学総長の大工原銀太郎氏（土壌肥料学）であった。その後懇話会は年2回春秋に開催され、昭和8年秋まで8回を数えるに至った。この間も本部とは非公式に度々支部設置に関して意見の交換がなされていたようであるが、第8回懇話会の懇親会（昭和8年11月）の席上、同会の発展が話題となり、同年11月京都帝国大学農林化学教室教官の昼食会でこの具体策が論議された。その結果、同会を関西における日本農芸化学会支部の形に改変するのが最も妥当であるとの結論に達した。この結論に基づき、武居教授は同月上旬上京を機に、東京帝国大学教授鈴木梅太郎、藪田貞治郎氏、および川瀬副会長、木原幹事に関西側の希望を表明し、意見を求めた。本部側に積極的な反対はなかったが、学会としての問題点を挙げ、一応4

月の総会に付議する案が出された。その後武居教授と学会幹事との間に書簡の往復があり、同年12月19日の常議会でこの件が可決された。

京都側では直ちに支部設立の準備を始め、昭和9年2月、懇話会会長大工原氏以下有志により支部設置に関する発起人会が開催された。この結論をもとに関西地方在住の正会員に趣意書を送り、賛意を問うたところ、富山、石川、福井、愛知、三重、岐阜、滋賀、京都、奈良、大阪、和歌山、兵庫、岡山、鳥取、香川、徳島、高知の各県から127名もの賛成が得られた。そこで支部設立委員会では大杉教授を代表者として賛成者名簿、支部細則草案を附して本部に対し正式に支部設立を願い出た。結局同年4月の農芸化学会総会において承認成立の運びとなるが、この間、各先達のご努力はなみなみならぬものがあつたと拝察される。これは一重に関西在住の農芸化学会の会員の燃えるような学問に対する意欲の支えがあつたからにはほかならない。初代支部長は京都高等蚕糸学校長村舜祐氏（大工原氏急逝のため）であった。

昭和9年5月20日、日本農芸化学会関西支部では創立総会、ならびに第1回講演会を京大楽友会館で開催した。その時のプログラムは下記のとおりである。

總會 1~2 時

講演会 2~4 時

1. デリ素と除蟲菊

京都大学農学部 武居 三 吉氏

2. アミノ酸の界面活性と吸着に就て

京都高蠶 伊藤 武 男氏

3. 演題未定（ご講演の内容はビタミンと栄養であった）

會 長 鈴木梅太郎氏

懇親会 5~7 時

會 費 貳圓五拾錢

（片桐英郎先生のお話をお聞きし、併せて関西支部保存の資料を参考にした）

（駒野 徹）